

情報通信審議会情報通信技術分科会 技術戦略委員会  
標準化戦略ワーキンググループ（第2回）議事要旨

1. 日時・場所

日時：令和2年1月22日 10時00分～12時00分

場所：総務省 11階 1101会議室

2. 出席者（敬称略）

（1） 構成員：

下條主任、丹構成員、稲田構成員、岩科構成員、崎村構成員、中村構成員、原井構成員、前田構成員、眞野構成員、三宅構成員

（2） プレゼンター

前田構成員

釧吉氏（NICT）

新氏（アラクサラネットワークス）

芦村特任教授（慶應義塾大学）

（3） オブザーバー

中野課長（経済産業省 産業技術環境局 国際電気標準課）

（代理：米山補佐）

村上参事官（内閣府 政策統括室（科学技術・イノベーション）付 参事官）

（代理：山本政策調査員）

（4） 総務省

松井技術政策課長、山口通信規格課長、森下宇宙通信政策課長、高村研究推進室長、松本通信規格課企画官、田邊通信規格課標準化推進官

3. 議事要旨

（1） 前回議事録の確認について

総務省より、前回議事概要の確認について、資料2-5に基づき説明が行われた。

（2） ICT分野における標準化を取り巻く動向・変化について、構成員及びプレゼンターより、資料2-1～2-4に基づき発表が行われ、各プレゼンテーション内容に対する質疑応答及び意見交換が行われた。主な意見等は以下のとおり。

- ア 前田構成員及び釘吉氏の発表についての質疑応答
- ITU-T や ETSI で(標準化を)やる意義と価値について、途上国向けに商品提案を行う場合は、ITU の標準に準拠しているという言い方をし、一方、先進国の顧客向けには、ETSI 標準に準拠していると説明した方が採用されやすいことがあるため、使い分けて標準化活動を行っていた。
  - 技術的な先端的分野の情報を得る、あるいは仕様確定させるというところでは ETSI にフォーカスをし、途上国向けのネットワークオペレーターで特に主管庁の影響の強いところは、ネームバリュー的に ITU を使うという使い分けをすることも多い。
  - ETSI は量子の関係、衛星関係の標準化をやっているところもあり、そこも非常にユニークな取り組み。その辺も注目して見ている。
  - ETSI と ITU-T との関係が場合によっては対立構造になっている。ETSI は本来、欧州の標準というミッションなのに看板はグローバル。実際 ETSI 仕様を元にインド等の企業と組んで海外展開を狙っており、ETSI と ITU が重複して仕事の奪い合い、邪魔のし合いが実際起きている現状がある。その中で、民間企業がどこにどういう目的で寄与したら良いか、戦略的には難しいところがある。ETSI は欧州を主体とする団体であるため、その中で日本がどう活用するかは戦略的には難しい課題。ETSI は技術先導とすると、ITU は途上国・先進国の要望を反映した戦略で、グローバルな組織であるということを協調したいが、ある側面戦っているというのが現状。
  - スマート ABC やスマートシティ等、非常に幅広い話があり、政策との絡みが重要となるため、1社ではなかなかカバーできない領域。連携が課題。
  - ITU は、ポリシーを含めたビジネスマターが非常に重要。ITU は、国連のテクニカル専門部隊なので、スマートシティの文脈でも WHO 等関連機関とジョイントで国連の傘を使って展開する。特に途上国等はそのようなラベルの下での検討の方が乗りやすい。今年の CES でもクルマ会社等グローバル企業が一斉に SDGs を言い出した。もはやグローバル企業は SDGs に取り組まざるを得ない状況なので、ぜひ日本企業も頑張っていたきたい。
  - ITU と ETSI は文書として引用でき、情報交換を図りたいときはそれぞれ情報をほとんど制約なく交換できる。そのような組織間の MOU の締結がある。ITU から見ると ETSI の標準は正式なドキュメントの参照という形。プロセスについては、それぞれの団体でオーバーラップした課題であるかどうかという認識だけで、それぞれの組織がやりたいことを決めるという形だが、平行してパラレルで進む場合もある。
  - オープンソースが議論になったのは、ETSI では、NFV がきっかけ。インプリメンテーションの際に、要求条件とアーキテクチャだけを決め、実際のインプリメン

テーションはオープンソースのコミュニティと協力するという大きな方針を決めている。ETSI 標準に準拠した製品の開発をオープンソースでやるということが実際のマーケットでも進んでいるところ。ただ、ITR の問題等、具体的な標準の中にオープンソースを取り込んだ際に、オープンソースのポリシーと標準の ITR ポリシーとが整合しないという問題もあり、そこをどう組み込んでいくか、いくつかのシナリオを作りつつ、模索しながら進めているという状況。それらの取り組みは特に仮想化の部分でかなり進んでいる。

イ 新氏及び芦村特任教授の発表についての質疑応答

- 日本ではデファクトやデジュールという言い方で分け強調されることが多いが、あまり建設的ではなく意味のない区分けだと感じる。
- W3C や IETF でもオープンにしていくことが重要となり、Plugfest やハッカソン等、実際に繋げてみるところがとても重要になっている。それらを日本で継続していくためのテストベットのようなものも重要。
- W3C では、デプロイの活動が重要と感じており、グローバルでも、新しいテストベットの整理することが課題となっている。それに対して日本からも情報を入れ、日本発信のアイデアやマニュアル等を取り込んでいくことができれば良い。
- W3C は基本的に実装が 2 つ以上ないと標準にならない。このテストが非常に厳しく、(仕様書に書かれた) 機能毎にテストリストを作って全部をクリアするという作業が必要。この作業の際に、テストベットを提供しているところとジョイントしていくことも必要なのではないか。
- ETSI が雇うプロフェッショナルスタッフの存在は非常に面白い。標準化活動を行う際に、分野毎に様々なプロフェッショナルな方々が参加し、ドキュメントを書いていることが興味深い。人が育つという意味では、ある種人材プールの機能として専門人材が雇われているということも非常に重要だと思う。
- W3C も様々な形でスタッフを配置していて、そのような人たちが実際にドラフトしたり、テストの手伝いをしたりしている。このような活動をする外のエンジニアを日本としてどのように上手く育てていくのかということも大きなテーマの一つだと思う。
- IETF については、v6 のときに企業連合と大学等学生のコラボレーションがあったため日本も貢献して企業も学生も一緒になって開発し、プロジェクトが上手く進み、間を上手く繋いでくれたということはある。しかし、それをフィーチャーしすぎると、昨今のウェブやサービス領域が加わって、プレイヤーの変化が起こっている状況に日本がついて行けなくなるのではないかと危惧する。新しいプレイヤーがどんどん入っているところを日本としても積極的に見ていかなければならない。
- IETF は個人参加であるため、ベンダーに所属していた人がいつの間にかサービス

事業者が変わっている等、同じ人が継続して出ているが、所属が変わっているということがよくある。日本でも同じようにプレイヤーがもっと変わっていかねばならないのではないか。それには新しいグルーピングや、組織の体制作りを進める必要がある。

(3) その他

事務局より、次回の会合は2月4日(火)13時～15時で開催する予定である旨アナウンスがあった。

以上